

飯豊山有情

日本山岳会 No.7734 木村 喜代志

飯豊山の山名そのものが、生産の豊かさを思わせるのもがあり、何か温もりに似たものを感じさせてくれる。しかし、山名から受ける印象とは裏腹に、日本山岳会の今西錦司元会長さんに、「飯豊はとてつもない大きな山である。日本でいちばん大きな山であるかもしれない。巨象といっても、長鯨といっても、形容にならない大きさである」(「飯豊連峰」-誠文堂親光社)と言わしめた山地である。

東北の山々は、奥羽山脈を中心に太平洋側に北上・阿武隈山地、日本海側の出羽山地と朝日・飯豊山地を中心とする越後山脈の三列の構造になっている。その中で飯豊山地は、奥羽山脈の吾妻連峰に楔のように打ち込まれ、越後山脈と奥羽山脈を結び付けている。2105m の大日岳をはじめ飯豊山、北股岳、御西岳、烏帽子岳、梅花皮岳など 2000m の山々が連なって、山形・福島・新潟 3 県にまたがる山地で、「飯豊山脈」の感がある。

飯豊山地は豪雪地帯としても知られている。雪解け水は山の動植物を育み、木地屋とマタギ、里に流れてた水は水田を潤し、人々と深い関わりを持ってきた。従って、山裾の人々にとっては恵をもたらしてくれる山であり、畏敬の念を起すのは自然の成り行きであったと考えられる。

飯豊山山頂には、飯豊山神社が祀られている。一説によれば役ノ小角(イノオノ)の開山といわれており、江戸時代に信仰登山の対象として開かれた。今日ではほとんど見る事が無くなった白装束に身を固めた参拝者が通ったコースに、草履塚、御秘所、御前坂などの地名が残る。なお、飯豊山神社の神は女神で、女性が近づくと石になってしまうという言伝えがあり、長い間、女人禁制の山であった。

このような神の山、飯豊山も 1922 年、沼井鉄太郎氏*1による飯豊連峰初縦走が発表されている。そして、1930 年、小林文平氏・藤島玄氏・高校生 4 名が加藤新六氏らの案内で飯豊山から杵差岳までの縦走で全容が明らかにされた。そんな中であって、鶴岡にも飯豊山に憧れ続けた人たちがおり、1948 年に石井貞吉氏*2による「飯豊山紀行」が発表されている。

「昭和二十三年七月二十日、私が十数年前から登りたいと心がけ紀行文や地図等で憧れて居た飯豊山登攀が実行せらるゝ日が恵まれて、年来の宿望が達せられることになった」で始まる手書きの記録である。

飯豊山山頂の様子を次のように述べている。「…三角点にほど近く朽ちて崩れかかった三尺四方石垣に囲まれた名のみのお宮に参拝した。小屋というのも石垣に囲まれた二棟の二間に三間位の板敷で、入り口脇に火気使用所等があり、往時の繁栄が偲ばれた。今夜は其の一棟を借して宿る。…外に出で夜の静寂に月光の青白くも冷たき光の内に体をひたす。近くの山々の頂きは光を受けて影をなげ北斗星輝き明日の行の楽しさを覚えしめる」

用意品として、米 2 升、鰹味噌、ワラジ 3 足、金カンジキ、焼酎などなどが見える。コースは、福島県の登拝路、弥平四郎口から入山し、山頂からダイグラ峰を降って温身平を経て、長者原へ

下山。メンバーは、最年少 36 歳、最高齢 71 歳の 6 名で、山頂まで案内人 1 人雇用と記されている。なお、文末には、微笑ましい絵が 20 枚添えられており、最後に、深山幽谷の中、騒々しい世間を離れて一人超然とした脱俗の心境を詠った「白雲抱幽石」*3 と唐代の禅僧・寒山の詩を書き添えてある。終戦後たった 3 年、全てのものが不足している時代の山行であったが、山頂で一夜を過ごし、焼酎を嗜み、気持ちを漢詩に託しつつロマンチックな紀行文を綴るといふ、なんとも優雅な様子が、時を越えて思い浮かんでくる。

飯豊山にはじめて登ったのは、1954 年、高校 2 年 8 月、山岳部の同期の WT、KK の 3 名だった。長期山行後、家でごろごろしているうちに急に山の虫が騒ぎだし出かけた。雨に会うこともなく、朝霧に身体を冷やす程度の晴天続きだった。コースは大日杉から入り切合小屋、飯豊山、御西岳、北股岳を経て、梶川尾根を降り長者原に下山した。主稜線までは急坂が続くが、大きな雪田を載せて打ち重なる山なみの主稜線に圧倒された。そして、ホームグラウンドにしていた蔵王から見ても大きな山塊だが、登ってみると一層の大きさに驚き、押し黙ったまま足早に先を急いだのを覚えている。

高校山岳部 OB の有志で結成した社会人山岳会で、蔵王中腹に山小屋をもっていた。会の支柱として活躍されていた UH さんが中心となって計画された飯豊山での春山は、学生時代の思い出に残る山行となっている。長者原から入り、温身平を経て地竹平にベースキャンプを設けた。連日、滝沢からクサイグラ尾根へ、入り門内沢や石転び沢と遊び廻った。ベース設営時に 1m 近く雪面を掘り下げて張ったテントが、撤収するときには周囲の雪面から 30~40cm も盛上がっていた。帰りは旭又沢からの雪崩を警戒し、温身平から山越えして泡ノ湯にでた。途中、2、3 日前に登ったとは思えない白い山なみを振り返っては、登る前に遠望した時と同じ心のときめきを覚えた。

高校で山岳部の顧問をしていた頃、夏休みの長期山行は朝日連峰と飯豊連峰を交互に組み込んでいた。どちらの山でもベースキャンプを主稜線に設けて、より広く歩いて、帰路は長大な尾根を降るのが不文律になっていた。

飯豊の場合は、石転び沢を登って、十文字鞍部の西、洗濯平にベースを設け、帰路は杵差岳経由で大熊尾根、あるいは門内岳から胎内尾根、北股岳からオオイン尾根を利用していた。

長大な尾根を降り終え、単調な林道を歩いている時だった。秋の学校行事である 10 km 走が話題になった。そのトレーニングを兼ね、冬山前に長い距離を走るようになった。誰からともなく出てきたのが、鶴岡から酒田往復 46 km だった。10 数人で国道 7 号を走っていると、走行中のダンプから「頑張れ!!」の声が飛んでくるほど長閑な時代だった。血気盛んな 30 歳前後の思い出である。

山形県が「朝日連峰」、「吾妻連峰」に続いて飯豊連峰の学術調査を 1966 年から 1969 年にかけて実施された。学生時代に朝日連峰で積雪期の写真提供、吾妻での関わりなどから地理班の末席に加えてもらった。主稜線上に見られる氷河周辺に見られる諸々の地形や石転び沢雪渓末端部で氷河確認調査、新潟県の日本海に注ぐ飯豊の豊かな融雪水を、水不足で悩む白川流域

へ隧道を開削して最上川水系の白川へ流した穴堰、養老四年(720)の信仰登山路が福島県に引き継がれた結果が、山形・新潟県境に細長く割り込んだ複雑なものになっていること、近代登山史などなど飯豊山を単に登るだけの視点から幅広い見方への変えてくれた。

飯豊の地形図を見ていると、他所では見られないカタカナ地名を散見できる。オオイン、ダイグラ(大嵩)尾根、ギルダ原、エブリザシ(杵差)岳、カイラギ(梅花皮)岳などなどである。いずれも見慣れないものばかりで、飯豊の山の原始性を強調しているかのようにも思える。しかし、文献や先人の知恵をお借りすると神の使いのオオカミ、田圃、農具、刀などとの関連が明るみになり、飯豊山を特色付ける信仰の山に結びついているように思えてくる。

学校の近郊を走り回り、山中を歩き回った当時の生徒たちは、還暦前後となった。地元で頑張っている人、鶴岡を遠く離れて暮す人、事故や病で亡くなった人と様々だ。ひたすら歩いた長大な尾根、鶴岡・酒田往復ランニングは、40余年という年月で浄化されて、彼らの心のアルバムにどんな画像となって残っているのだろうか。なお、彼らの母校の山岳部は、部員不足で数年前に廃部になっていることを昨年知った。

(2011/3)

- * 1:沼井鉄太郎(1896~1959)秋田の人 旧制二高から東大へ、1935年卒 早くからスキーに親しみ、学生時代に蔵王、朝日連峰などにスキー登山 卒業後、冠松次郎と黒部廊下初遡行 発展期の日本山岳会に大きな足跡を残した
- * 2:石井貞吉(1899~2001) 鶴岡生まれ JAC3525 1925年 朝日連峰縦走(山高山岳部に同行、史上2番目) 1928年 鶴岡山岳会創設 1936年 中房温泉・槍ヶ岳・上高地 1942年大町・針ノ木峠・立山・剣岳・室堂 1950年 朝日連峰八久和川初遡行 1965年 月山北面でヒナチドリ発見 1968年 月山でアオモリトドマツ発見、オゼコオホネの北限を月山で確認
- * 3:白雲幽石を抱く(白雲抱幽石)―「寒山子詩」
「重巖我卜居、鳥道絶人迹。庭際何所有、白雲抱幽石。
住茲凡幾年、屢見春冬易。寄語鐘鼎家、虚名定無益」